

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
今泉 茂一 ^{もいち}	男 性	24 歳	豊橋市 (新城市豊島)

「現地の人のおかげで……」

「東三河郷開拓団からの手紙」より

私は旧千郷村豊島^{ちさと ふうとう}で普通の農家の五男として生まれ、現在69歳^{さい}です。長男夫婦に孫2人に恵まれ^{めぐ}、妻と二人で自営業を営み、毎日元気に暮らしております。

昭和17年の春、北満（現在中国東北チチハルの奥）の開拓団に入植しました。その頃の自分の気持ちは、召集（兵役につくこと）^{おく かいたく}されて戦場へも行かず、4、5年頑張ればひと旗揚げられる^あと思ひ、国のためというより自分のためという考えの方が多かったように思います。

現地に着いて約2年間農業をしていました。開拓といっても荒野を開墾したことはありませんでした。先住民の農地を無理やり買い取りして農業をしていました。衣食住は国家（日本）の援助^{えんじよ}だったと後になって思いました。現地では、開拓民の我々は大いばりで生活をしていました。現地中国人の気持ちなど思いもせませんでした。今思えば、恨んでいることと思ひます。

昭和19年5月、現地召集され兵隊につくことになり、東満の悲徳^{ひとく}へ入隊しました。その頃の若い団員は、ほとんど兵隊になりました。

昭和20年夏頃、ソ連が参戦してきました。その時、捕虜^{ほりよ}になるよりはと10数名の兵隊がいっしょに南の方へ逃げました。

途中、日本人の避難民も大勢いました。北の方は寒さが早く来るので、寒さと不安と飢えで死ぬ覚悟^{かくご}で吉林省まで来ました。現地人に銃と綿入れの衣服と替えてもらいました。一緒に逃げた人は、途中襲撃に遭い、バラバラになってしまい、部落へ入ったのは二人だけでした。それから8年、現地の人の家で世話になり、生活を共にしてきました。現地では日本人は私一人でしたが、皆よくしてくれて、おかげで生きながらえることができました。

昭和28年暮れに、吉林省の敦化の駅より奉天、北京、天津を経て、無事舞鶴港に引き揚げてきました。今、現地の人々に心から感謝しています。戦争だけは二度とやってはならないと、今の平和がいつまでも続くことを願っています。

平成2年11月1日

(記録者 下山麻美)



東三河郷開拓アルバムより